



その4

近江毛野臣

—おうみのけなのおみ—

(平成21年5月1日号—第260号)



「ひらかたゆ笛吹き上る近江のや毛野の稚子[わくご]い笛吹き上る」

毛野は、近江を本拠としたと考えられる継体[けいたい]期(6世紀前半)の武将です。継体天皇21年(527)、新羅[しらぎ]の圧迫を受けた朝鮮半島南部の加耶[かや]諸国からの援軍要請を受け、毛野が派遣されます。このとき、九州北部で勢力を誇っていた筑紫国造磐井[つくしのくにのみやつこいわい]が、新羅と結んで毛野の軍勢の渡航を妨害(磐井の乱)しましたが、翌年、物部麁鹿火[もののべのあらかい]によって磐井の乱は鎮圧され、毛野は海を渡ります。しかし、彼の地で毛野は成果を上げることができず、同24年、召還される途中の対馬で病死しました。

船に寄せられた亡骸[なきがら]が、その子どもたちに伴われ近江に向かって淀川をさかのぼります。知らせを聞いて近江から迎えに来た毛野の妻は、枚方あたりで葬送の笛を奏でる船に出会い、悲嘆にくれて冒頭の歌を詠みました。

歌にある「ひらかた」は『日本書紀』では「比羅笏」と記されていますが、当地枚方のことと考えられ、これが地名枚方の初出とされています。

ただし、毛野の妻が歌を詠んだのは近江に入った後とし、「ひらかた」は近江国坂田郡平方(現長浜市平方町)を指すという説もあります。



枚方あたりの淀川